



奇說排悶錄

後集

四

特別
21
2460
10



21
2460
12-10

尾定

奇説排門録卷之九

玩世之部

目錄

申殷張

史癡

宋連壁

烏程夜遇

陶成

狗皮道士

燐雌兒

非月録卷之九

武風子

劉酒

周鐵墩

合十種

奇說排門録卷之九

玩世之部

申殷張

六樹園翁 譯

永年えいねんの申和まんとわ。字あざなと潏光えいこうと云人いひ也。即愍公せいのんこうの長子ちやうし也。言行正えんぎく文ぶん章あやある人ひと也。殊ことごとみ詩うたを善作よくつくす。河朔くわく地ちのあひだ間ま名な高たかくままり。同どう学がくの書あきせいのわ生なまくも大官たいくわんと成なりけ共とも申まを獨世どくせいみ隱ひそくこころ事ことへまり。故人こじんの京きやうより書あひだを贈たまふ申まを報はつしてこころ詩うたを作つくす云いひ秋陰あきかげ命いのち筍輿たけのこ故人こじん天てん上あたま落おち雙魚ふたごい荷か巷ちやう未な老らう新醪しんらう熟じやく為な道みち無間むかん作つく報書ほうしよと其簡傲そのかんごうある事こと斯かくの如ごとし。其比そのち同どうく廣羊山くわやうざんの中うちみ隱ひそく者もの也。殷岳いんかく宗山そうざん張蓋ちやうがい覆輿ふくいの西にし士しる。殷いんと五言ごげん古詩こしみ工くわる。平生へいせい近體きんたいの詩うたをえ作つくらぬ。晉しん晉しんと睢寧すいねい地ちの

排門録卷之九

今いま不なりし。自みづか官を罷り歸り多くとらん張ちやうと草書を善よくし。輕俠とと
交まじる。晚亂らん不あ値ひと。世中を避まぐ事ことるるをせむ。人ひとと接ある事ことをせむ。人
私ひそ不な之を伺うふ張ちやう。夜よ不な乘まと。經傳を讀よみ且かつ不な達たふ時とき々々痛いたく哭なく
る。とぞ張ちやう申ま贈く詩い云い草澤賢豪盡上書奎章閣外郎公
車我甘漁父因衰老獨有誦先是隱居と作つくり。後狂を發はて
死しふ。と申ま和孟為不傳を作つく。遺詩二卷を刻うと。世不な弘ひろふ。と

史癡

史癡翁と金陵地名の人あり。佯と狂とと世を玩たり。詩画樂府小工あり。
妻を樂清道人と號す。姫入何氏と白雲と號す。画を善し。家書又工
ゆと音律小通せり。琵琶と西京南北の京の園工長祿之傳を受ふ。翁一

曲を製つくまる毎ごと白雲の命めいとと之を琴きんのひと。彈む。嘗かつと沈石田
人を具中の中ちゆう往ゆと訪たづねふ他たのひと。値ず。堂上の絹素の張はる。と
以もて筆ふでを漆し物もののひと。輒筆を取とり墨すのひと。濡し。縦ふ山やま木きを画え死し姓せい
名なを題だいせとと。去ぬ。沈石田歸かへと之ををと。曰吾われ具中のか。人無なし。必
金陵地名の史癡と云と云と。亟い追おひ。之を邀まへ相見あひと。大のひと。笑ひ。と
翁石田が家うち留とり居をる。と云い。三月さんむ。りと。返けり。翁が誓ちか初約束はつやくそくへ。れ
と。甚分ぶん負ふと。誓礼れいを調とる。能あ。りと。公羽は其その人ひとの智ちと。曰中秋ちゆうしゆう十五ごの夜よ
我われの酒さけを飲のむと云い。誓ちか其その夜よ其その用もち意いと。待をり。公羽は妻さい女によ云いと。か
良夜らや十五ご我われの後あとと。遊ぶ。と云いと。妻女さいによを携たづみと。月をを見るみる。と婿むこの家うち
不なる。と。縁ゆかりの合あ色しきを成なさ。りと。帰る。と其その風かぜ致いた想おもふ。と翁の。

非門録卷之九

宋連壁一

宋連壁と字を玉梧と云々。吾乘北郭の入り巨族の家あり。諸家率享謹る。我壁獨俠行を以て。里中を驚駭せり。然るも其性至孝あり。父を鳩臚丞官をわたり。老く奇疾を染りて臥ぬ。其疾を尋ぬる。臍より緑汁数合。日々流出。醫も治まらざる。能はりたり。茲に道士の破たる衣着するが。其家ぬ入ると曰。乳熊の肉ぬ非を能療するや。と。此山左の地の熊をけむが為方なり。其俟りて天命をまつべいと云ふ。壁是山豈天上るらんやと云く。乃其より歩行して秦中の中ぬ入深山の入り入る。虎をくほらく唾せんとせしが。幸小獵人数多至りけむを虎とて去る。斯くもた乳熊を取得んと思ひて。日々深山ぬ入る。熊の

住む穴を捜し。係が辛くして親の熊の出往たるを忍び。穴ぬ入りて乳熊二を刃殺し。之を懐ぬ入ると出る。親の熊歸來ぬ。壁驚きあはて崖谷の下ぬ仆れ墮ぬ。いつて両趾を傷けし。歩行できず。るりぬ。然るも乳熊を懐を放さず持し。其夜もあつた。何ぞある。廟中ぬ入ると宿まる。夜更くと戸外は履の声しけむ。壁声を聞き。遠くより来り客あり。命を援玉へと呼ぶ。彼人へ袖中より草を取出。と與ふ。此人をよく視れば。曩に遇い道人あり。壁大に駭く。師何とて是ぬ至り玉ると問へむ。道人爾を待事久しと云く。藥を壁が足ぬ。付けし。足輒立ぬ。道士一書を授く。皆符呪の文なり。汝善此書。我用ひ。四十年の後再と鳩臚の市。會んと云く。別は壁遂に家ぬ

至也。父の乳熊の肉を進めけしむ疾ふぐと瘡々也。後数年を経る。
 父他の病ゆくと後しぬ壁愈世俗を厭ひ棄て五嶽の遊び山入る山 水之樂む
 為んと欲し。稍道人の遣まる書を考と讀明め能形を隠し風雷兩
 を驅ま侍御名游公の幕府の客と成る在る處が崔魏と云者侍
 御を忌と其家の禍し。又侍御が家の妖術の者を匿せりと報けし。
 緹騎至る侍御と壁と疾縛め。檻車に乗る河西地名 勢必至る壁
 が曰諸公を煩ま言を中貴の告ふ我野人のめと豪家の事必習後
 他に往んる欲まと云ふ。諸緹騎急め檻車を視ま。寂とくと人無し。
 其より壁侍御と共に淮上地名 亡ぬ叔壁が曰君楚中楚に歸るべしと。
 一符を取て侍御に付す。急と之を焚く別る。是時壁姓名を愛とと。

張思任と云ふ。是に依り朝廷亡者張思任を捕へんとす。壁が家人を
 知らざりたり。壁乃某の宗伯の家へ潜り居る小某之小遇しとあるの殊に
 厚し。時小權家宗伯と不和る。壁が曰困の賊りるとく乃長安地名
 走る權家へ險を行ひ善人を誣逆謀を為を訴ふ。早く司殺官の
 下し。罪を正し玉ふと申す。帝大に怒り壁を執へ西市地名 引出て
 斬しむ。時小桎梏忽地小脱。寂とくと其人を見ず。其時ゆる壁又姓名を
 愛しと李抱真と云ふりけしむ。朝廷令を下しと亡者李抱真を捕へむ。
 壁が家人又之を知らざりけり。壁前の道人の約を憶ひ鳩茲地名 の市に至
 りて。居處を構て道人を俟つる三年の事あり。一日人大に牆外小声を
 聞きと曰此中亡者三人を匿せむ。宋連壁張思任李抱真連小聲と呼

へたり。壁大に駭く手足を措けり。其人已に圍を排くへ至れり。見
 ねば昔日別たり。道人あり。壁を責む。曰。汝風小道の契わむ。汝が我
 書を與へてきた。汝いんぞ黨錮（あつち）の者（もの）。天下（あまの）の罪人（つみびと）。のこみ與し。天下（あまの）捕逃（とら）の客（きやく）
 とる成しぞ。吾此故の三年を過し。逢く至すと云。壁頓首（とんすう）。一と罪
 を謝し。此より師の後ひと永く世縁を絶せん。おの妻子を害さむあつと
 と云へ。道人曰。不可あり。汝古郷小還り。再び家人を召しよと云。道士を
 飄然とくく去けし。壁せんく無く。藥囊を携く家小至り。見れを
 妻已に死し。久くあり。一子夢端と云者。壁がより。時周歲ゆ。有
 けし。父を見知らず。壁一廟の中小棲く。曰。我を張思任り。後李抱真
 と名を改めり。茲村と縁わむ。来れり。と云。同母弟珠と云者の張李を

捕めり。時小當り。其兄の壁がるるんと疑ひ。敢て人小告げり
 一。此時小動れ。朝小往く。扉を啓き見。兄弟の壁あり。兄弟對面
 しく相語り。其子を呼く。具し其由を告ぐ。値を存ぬ。壁數日此處小居り
 居し。後又往所を知り。と云。

烏程夜遇

烏程（うしやう）地（ち）の温相公（おんさうこう）。太政（たいてい）政（せい）を致し。古郷小歸ら。後墓所を尋ねんと
 山中小入り。道小迷く。行先昏黑く。心小をたると。限あり。迷る方小林
 を隔く。火の光見え。漸しく彼處またどり着く。見る。家の中。又
 書を讀む。声せり。門を叩んと。受む。門とわづ。見所も無けし。書外小
 立ち。一宿せし。成云。内より應と云。此處虎狼多し。我僕已に外に出

宋連壁至孝の徳ありよりの熊を得る再び道人に遇ふ



華本繡像模寫

往く戸を肩を以て倒鉤藤を以て門外に縛りて見ゆ。我相と客を
 容る事を以てと云ふ。従者兵器を携し、藤を斬門を放し入る。
 此倒鉤藤と虎狼の畏る物也。一たび其刺小觸る時を展轉して此
 おとと。驚る小至るまで相公の従者の中、山中の人あり。此藤性
 を識く斬て之。然るに兵仗あり共ざる事能はざるものなり。堂小登り
 見下燈の下、小書を讀む人あり。相公此人小對ひて。千古の興亡人材の
 高下。學術の醇駁を論む。甚明白ゆ。卓識あり。又河圖律歷の諸
 書を談る。其源を究るる。相公主小向ひて。予斯る全才ありて。
 何ぞかく仕へざると問へ。主の曰。今より十年の後天下亂ると。大厦の木
 の能支所るらずと云ふ。相公大慨嘆して。自政事を取らぬ。ふと云ふ。

せむ。此小於く烏程。相公より之を知り。忽ち伸をり。痛楚せし状と
 り。舊恙俄に發せりと云く。遂に復言む。姓名を問へ。亦答ふ。
 多し。夜半小至る家人歸る。汝見ま。禽獸の属を数ヨリ携たり。此を
 獵して得る物と見ゆ。明日相公回て再人を遣る。其居處を尋らせむ。
 小行方るありぬ。夫隱逸の士或は泉石小耽り。或は軒裳を厭ひ或は
 世を避く。清を待類。其倫一なる。烏程相公が遇所の者の如き。踪跡
 再見えむ。名亦聞えざる。一等を起る。高人ありし。

陶成

寶應 地より卷らる。孝廉 孝廉のて。陶成字を雲湖と云人あり。
 朱升之大叅が妻の父なり。畫を善す。高を以て大は名高し。幼き時師よ

従く学びける此師の妻を見く之を圖す。次其女を見く。又之を圖す。皆く似く真の逼り多し。師見く怒り逐り去る。陶成花鳥人物を寫さる。最工なる上。芙蓉尤神入る。其妙を極けり。あまも世に傳へず。其性測識盡くなく。富人畫を求めんと。尚者敢て言ぜず。陶成が游歴は所所於て遍芙蓉を栽て待り。秋日花盛の閑多し。陶成過て喜事甚し。主人已に絹素を具く。庭に張て置を立。あろふ二十幅なる紙畫に酒を索て飽す。飲後辭して往り。嘗て升之と同じ會試の赴く時。試の期日僅三日の及ばる時。陶成升之の語て張濟地名の某氏の丁香甚閑きぬと云く。子我と共に往り見ると云ふ。升之試の期近くありけし。辭して往り。陶成小車を雇ひ徑に其家の

造り花下の痛飲して五日を過し。去りて遂に試期を俟けり。又故と遊べるる露多し。時の御史陶成が名を知りて之を心あり。伎又贈て所詩を觀く。此も子作非トと云へ。陶成之を争ひ。我書る所相違あり。天下の歌詩。豈陶成が右に出る者有んや。然るを争他人の作と云えんと云々。依。竟に罪を得て除名せしむ。晩年成て一伎の甚美なる小遇。が其の接を肯せざり。陶成自錦裙を織て持往り。妓ゆえせける。其精る所る鬼工の類せり。妓大に喜て逢ふ。叔其妓を獲りて道々所が。又罪を浴て成邊に謫せしむ。識流れるる也。

狗皮道士

狗皮道士の何れの所に入るると知る。其姓氏も詳る。明の末の

道冠を冠す。赤寫を躡狗皮を披す。成都成都の都の市に食してあり。毎小人家に至りて食を乞ふ。大の吠る声をまねび成小酷相似たり。大共其声をゆり。真の犬なり。とゆひ羣集して吠る。道士怒り忽虎の嘯声をなす。犬皆碎易しく吠る。毎小獨破廟に居り。夜の深るふ至る。一犬の吠る声を作す。少頃あやしく衆犬の吠る声を作す。そのさま正しく百千の犬の齊く吠るが如し。久くして國中の犬皆吠る。四境小邊せり。とらん。一年餘を過し。献賊其比張献忠と云者朝敵と云り入る。致しける時道士突る。賊の馬前馬前に至る。事數十歩し。大の吠る声を作し。六献賊怒り羣の賊をうと。馬を策う。逐て殺さん。道士徐々として行を賊数馬を策う。てども馬前馬前に賊多し。怒り矢を

射かゝる。雨の如く。とて。一もあてず。献賊えんぞくのよく大の怒り。と云く親馬の策し。矢を射る。其首の中そのうちにけるとゆひ。其矢飛る。賊の馬の中そのうちに馬斃る。献賊大の駭り。追がり。他日献賊尊號を僭僭す。元旦を祝す。賊等皆百官の職を設く。朝を成す。時道士狗皮を披。班行ばんぎょうに列す。笏を執り。犬の吠る声いぬのこゑをうと。至りて。大の怒り。羣賊をうと。之を縛す。道士大の吠る声いぬのこゑを作す。其聲中數千百の犬争う。吠るが如し。此声四方に徹り。合城の犬声をゆり。和と吠る声。天地も震ふが如し。献賊大声えんぞくおほいこゑに令を出せ。其犬の声いぬのこゑに乱れ。とゆひ。献賊大の驚り。退り。既小退り。後犬の声も息。道士も何方いづれに往り。知者しりやをうり。と

雌雌児

雌々児は何色の人なるか。姓氏も悞るる事。自言崇禎^{二年}の時の孝廉^也ありしが未幾むくるる處^也。道士とるまると言き。江淮無錫^{各地}の^間必往來せむ。黃介子先生と云者を識く睦くせむ。其家必至る必一の刺を出すと。上は^{大書}。年家眷弟雌々児頓首再拜とせり。入く相見ゆ^不必交拜^一。別去時必頓首^也。衲衣の外他物無^一。只腰小^き竹筒^三と大錢のま^り五寸計る^也。後雲間と云處^に遊び^つる。雲間の諸氏素封の家有りけ^ば。空屋の三百餘楹有^り。雌々児往^て之を^就。數の如く値を遣^り。既^に家^に入^り。其戸を鍵^し。獨^に堂上^に坐^し。居^る。佩^る竹筒を取^り。蓋を揭^ぐ。之を傾^け。芥子の^汁を^飲す。

者^如く地^に躍^り。止^む。須臾^に盡^く。椅^卓。幃^帳。器^皿。化^し。具^つぐる事^無。又一筒を取^り。傾^け。芥子の^汁を^飲す。暫^わく^く穀^粟。飲^食。牛^羊。雞^犬。具^をと^り。奔^走。者^ある。堂^に宇^を掃^除。者^ある。器^用。整^る者^ある。頃^刻の^や大^富貴^の家^とる^ま。諸^氏。隙^に窺^見。大^に驚^き。怪^むる^限。雌^々児^車馬^を乘^り。僕^從を^擁。通^函。遊^びる^居る^久く^有て^諸氏^を妖^りと^云く。人^を以^て辨^せめ。家^をあ^け。雌^々児^盡く^妻妾^僮婢^器用^牛羊^の類^を以^て筒^の内^に納^め。飄^然と^出往^る。叔^終る^所を^知ら^ずと^るん

武風子

武風子^{ぶふうし}、漢^{かん}の武定^{ぶてい}、別^{べつ}名^なの^の人^{ひと}なり。名^なを^を恬^{てん}と^と云^いふ。性^{せい}の^のろ^ろ酒^{しゆ}を^を嗜^しめ^る。漢^{かん}の^の地^ち多^たく^く細^{さい}竹^{ちやく}を^を産^えむ。箸^{しゆ}の^の作^{つく}る^る金^{きん}。武^ぶ子^し火^ひを^を以^{もつ}て^て其^{その}上^{うへ}に^に。禽^{きん}魚^{ぎよ}花^か鳥^{ちう}山^{さん}水^{すい}人^{にん}物^{ぶつ}城^{じやう}門^{もん}樓^{ろう}閣^{かく}を^を画^えく^く其^{その}精^{せい}る^る鬼^き工^{こう}を^を奪^うふ^ふ人^{にん}を^を奇^きなり^りと^とし^して^て重^{じゆう}ん^んト^トなり^り武^ぶ子^し少^{せう}勃^{はく}と^とを^をま^まく^くを^を人^{にん}の^の與^よへ^へむ^む。好^{こう}事^じ者^{しや}其^{その}酒^{しゆ}を^を欲^{よく}する^る時^{とき}を^を伺^{うか}ひ^ひ。拓^{たく}く^く酒^{しゆ}飲^{いん}せ^せ火^ひと^と箸^{しゆ}と^と疾^{しやく}前^{ぜん}の^の陳^{ちん}置^ちと^と詔^{しよ}む^む。居^いま^まに^に武^ぶ子^し臂^へを^を攘^{じやう}と^と誓^{ちか}ひ^ひの^の不^ふふ^ふ。數^{すう}十^{じゆ}籌^{ちゆう}を^を作^{つく}り^りて^てを^を揮^ひひ^ひく^く。顧^こす^すと^と空^{くう}を^を往^{わう}たり^り。或^{ある}は^は醉^{すい}中^{ちゆう}の^の於^おて^て箸^{しゆ}を^を以^{もつ}て^て彼^かの^の換^かけ^けと^とい^いふ^ふ。王^{わう}公^{こう}大^{だい}人^{にん}漢^{かん}の^の遊^{ゆう}ぶ^ぶ人^{にん}武^ぶ生^{せい}が^が箸^{しゆ}を^をぬ^ぬぎ^ぎま^まに^に先^{せん}わ^わと^とせ^せり^り。丁^{てい}亥^{がい}の^の歳^{さい}

流^{りゆう}賊^{ぞく}蜀^{しやく}より^{より}か^かぶ^ぶま^まと^と。漢^{かん}の^の奔^{ほん}と^と入^いける^る漢^{かん}の^の士^し民^{みん}靡^みき^き後^ごへ^へる^る者^{しや}なり^り。武^ぶ子^し獨^{どく}深^{しん}箒^{しゆう}の中^{ちゆう}の^の匿^{かく}と^と出^でむ^む。賊^{ぞく}賞^{しやう}を^を懸^かく^く武^ぶ子^しを^を索^{さく}む^む。武^ぶ子^し大^{だい}小^{せう}笑^{しょう}と^と曰^いふ^ふ。我^{われ}豈^{あらずや}奇^き技^ぎ淫^{いん}巧^{こう}を^を作^{つく}り^りて^て賊^{ぞく}を^を悦^{えつ}せん^んや^や。偵^{しん}ぶ^ぶ者^{しや}賊^{ぞく}の^の告^こげ^げ且^{かつ}武^ぶ子^しを^を繫^けめ^めて^て来^きり^りし^しむ^む。武^ぶ子^し白^{はく}眼^{がん}を^をる^る。天^{てん}を^を仰^{あや}ぎ^ぎ一^{いつ}語^ごを^をま^まに^に。賊^{ぞく}命^{めい}と^と著^{しやく}を^を作^{つく}ら^らむ^むと^とい^いふ^ふ。金^{きん}布^ふを^を武^ぶ子^しの^の前^{ぜん}の^の列^{れつ}の^の醇^{じゆん}醪^{らう}を^を右^{みぎ}の^の設^{せつ}と^と誘^いふ^ふ。武^ぶ子^し答^{こた}へ^へて^て刀^{たう}鋸^こを^を以^{もつ}て^てお^おび^びや^やを^をさ^さぐ^ぐも^も應^{おう}ず^ずる^る無^なし^し。賊^{ぞく}怒^どり^り引^ひか^かせ^せて^て斬^{ざん}べ^べし^しと^とい^いふ^ふ。縛^{ばく}と^と市^しの^の至^{いた}る^るの^の神^{しん}色^{しき}自^じ若^{じやく}と^とい^いふ^ふ。言^{こと}は^はる^る。賊^{ぞく}帥^{しゆう}宥^いと^とい^いふ^ふ。緘^{けん}と^と遺^いて^て静^{じやう}め^め其^{その}技^ぎを^を作^{つく}ら^らむ^むと^とい^いふ^ふ。釋^{しやく}と^と放^{はう}遣^{てん}たり^り。此^{こゝ}より^{より}武^ぶ子^し髮^{はつ}を^を披^ひし^し。佯^{やう}と^と狂^{きやう}人^{にん}と^となり^り。垢^{あか}つ^つた^たる^る形^{かたち}と^とい^いふ^ふ。恠^{あや}む^むる^る狐^こを^をさ^さづ^づつ^つり^り。市^しを^を歌^{うた}ひ^ひ哭^なく^くと^とい^いふ^ふ。夜^よよ^よと^とい^いふ^ふ。犬^{いぬ}豕^しと^と共^{とも}に^に臥^ふす^す。人^{ひと}呼^よび^びて^て武^ぶ風^{ふう}子^しと^とい^いふ^ふ。云^いは^はる^る。

安定あんてい名地なみちの守某しゆきやうと云人ひと貴人きじんの属ぞく一ひと武子ぶしを召よく。箸しゆを作つくらせんと
 まふ武子ぶし應こたへむ。守怒しゆどく。庭にわぬまふく。捷あしうけ且かつ六む。血ち流ながるふ至いたる
 武風ぶふう子し踪あと跡あと定さだまふるを。或ある琳宮りんきゆう梵舍ぼんせ。或ある市肆しし田家でんけ
 往ゆけが必かならず数日すうじつ田居でんけ。留とどめやうくハ必かならず數十すうじゆの箸しゆを作つくて。醉あひを謀まる其その箸しゆ
 一ひと名なぐく。数十すうじゆの炭すすきを筆ふでの如ごとく削けり。列れつ火かの中なかに置お置き酒さけ壺つぼをも。旁わらわ
 ぬ置お置きと。炭すすきの末すえの紅べにぬし。錐きりの如ごとく派はい同どうひく。左ひだりの箸しゆを執とり。右みぎの炭すすきを
 執とり。甫ふ々と声こゑあつる。蠶さかの桑くわ葉はを食くらふ如ごとく。其その快事くわいじ風雨ふううの如ごとく。且かつ飲のみ
 且かつ画えく。壺つぼの酒さけ盡つくまふを止とどめ。酒さけを益ませ。復また作つくる。飲のみ杯はい杓しやくを用もちむ。口くちを
 壺つぼぬ就すぐ飲のむ。酒さけを擇えらむ。醉あひを期きとす。醉あひハ火かの前まへに臥ふす。或ある哭なく
 或ある歌うたふ。或ある論語ろんご經書きやうしよの類るいを説とくみ。多おほ奇き解かいあむ。醒さる時とき之これを向むかへむ。

他のたの藝語げいごを以もつて對たいふ。或あるも亦またがける。最中さいちゆう。酒さけのまじり。畫えるふ。何いかくも往ゆく
 歸かへらむ。数すう十日じつ又またも数すう月げつを過すす。忽たち來きく之これを作つくむ。其その状じやう貌ぼう中ちゆう人にんの如ごとく。
 年とし六十むそ餘あまふ。拜まがり。跪ひざ起たれ。人ひとと異ちがふ。所ところる。惟ただ共ともに語かたる時ときハ風子ふうし
 ろり。繪えが充みたる。の。押官おし雜劇ざくの圖ずわりの。雅馴がる。と云いふ者ものあまふ。大おほく
 答こたへむ。亦また終はぬ。易やすく作つくらむ。或あるも風かぜを病かる者ものハ非あらず。と云いふ。或あるハ有あり。道みち
 の人ひとる。んと云いへむ。

劉酒

劉酒りうしゆは。名な無なし。自酒じしゆと呼よび。人ひと稱せうとく。劉酒りうしゆと云いふ。
 人物じんぶつを画えく。清勁せいけいの致いたる。酒後しゆごの運筆うんひつ。神かみ入いる。人ひと張ちやう平山へいざん。世よに
 画人えびたが後のち一人ひとりあり。と云いふ。劉酒りうしゆか。満足まんじつせむ。凡画おほか。小皆せう一ひとの酒字しゆじを

あり。其藝天然の妙を感へり。常の席上の侍の甘き物語をどさせり
 るゆめ。古今の故事をく知り。口軽くくわく死者を有ける。夏
 申相園の家の新劇の風うち上り。心ゆくき呀あましく。際ごうく世のま
 ぐまたる故の常の難劇を好むる人。えきうひあすしく好く見たり。
 見るよりも先見する。公遣しくぞ見たり。悲そ樂み泣き尖る。世情
 のありさる感見せると。藝の妙あるよ何心なく見たり。各ののちけ
 たる。さむ公のさぶを頭をさす。くく見苦したるも何らん。鐵塚が
 如死者の傍くく見たり置たり。又狂言より入るやせん。心遣ひを
 るるりたり。鐵塚が上の名を取らる。四十年をうらる。其中め世変り
 事たり。相園の家もを後へ行。拘へける歌舞妓も。方々めを失

ぬる所を。近比時め逢く富貴を得る。あはれ招死集むる。先鐵
 塚を殊の要と。係をきく。丸弾きく云。斯あり。あはれ。その年の年
 頃むつひをせし。相園の恩を忘る事。今更に更しくあせる。その
 るたあはれ。隨ひく。人々別と。往く。斯く三四十年を
 する程。世中静まり。相園の家猶々舊き。返り。雜劇を再興せし
 時。鐵塚も又立返り。再出来。その。舊き。忘る。人得難く
 時。後。多。目。鐵塚が。人。或。物思ひ
 知る人。感。尾定

奇説排門録卷之九 畢

